

# 主 論 文 要 旨

報告番号	甲 ㉔ 第 号	氏 名	原 田 英 治
<p><b>主 論 文 題 名</b></p> <p>Residual symptoms in patients with partial versus complete remission of a major depressive disorder episode: patterns of painful physical symptoms in depression (大うつ病性エピソードの部分寛解および完全寛解患者における残遺症状：うつ病における疼痛性身体症状のパターン)</p>			
<p><b>(内容の要旨)</b></p> <p>大うつ病性障害 (Major Depressive Disorder: MDD) の治療における理想的なゴールは、症状の完全寛解 (Complete Remission: CR) に至ることと、そのエピソード以前の機能レベルまで回復することである。しかし、約1/3の患者は部分寛解 (Partial Remission: PR) にとどまり、不十分な改善と持続的な残遺症状を経験する。これまで、残遺症状の臨床的模式はハミルトンうつ病評価尺度17項目 (17-item Hamilton Rating Scale for Depression: HAM-D17) を用いて評価されてきた。しかし、このうち「一般的身体症状」の項目には疼痛性と非疼痛性の身体症状が共に含まれるため、残遺症状における疼痛性身体症状 (Painful Physical Symptoms: PPS) の有症率は不明確であった。また、MDDに伴うPPSは、予後に悪影響を及ぼすことが知られているが、残遺症状の一つとしてのPPSは重視されてこなかった。本研究では、中等度以上のPPSは、CRの患者よりもPRの患者においてより多く認められるのではないかと仮説に基づき、残遺PPSのパターンの評価を目的とした。</p> <p>本研究は、国内27医療機関の精神科または心療内科における外来患者を対象とした、多施設による横断的な観察研究である。対象患者として、年齢20歳以上で、Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision (DSM-IV-TR) によりMDDと診断されたのち、12週間抗うつ薬により治療され、その結果組入れ時点でPR (HAM-D17にて8点以上、18点以下) または CR (HAM-D17にて7点以下) を達成している患者が登録された。組入れの際に性別および年齢(20-39歳、40-65歳、66歳以上の3層) に関してペアでマッチングされた。評価としては、PPSの評価のため、簡易疼痛質問票 (Brief Pain Inventory-Short Form: BPI-SF) を用いた。BPI-SFにおける問5 (平均な痛み) が3点以上の場合を、中等度以上の疼痛とした。うつ症状の評価のため、HAM-D17を用いた。</p> <p>323名 (PR165名、CR158名) の患者が組み入れられた。平均年齢は46.2歳であり52%が女性であった。PR群とCR群の患者のHAM-D17評点はそれぞれ、11.8点と4.4点であった。中等度以上のPPSはPR群においてCR群よりも有意に多く認められた (37.0% vs 16.5%; <math>p&lt;0.001</math>)。中等度以上のPPSの存在を目的変数、グループ (CRまたはPR)、性別、年齢を説明変数としてロジスティック回帰を用いても、中等度以上のPPSはPR群においてCR群よりも有意に多く認められるという結果が得られた (オッズ比=3.04; 95%信頼区間=1.78-5.18; <math>P&lt;0.001</math>)。</p> <p>MDDにおいて、PRの患者では、CRの患者に比べて、残遺PPSが高い頻度で認められた。PPSはその臨床的重要性にも関わらず、一般的によく用いられるうつ病評価尺度では評価が難しい。しかし本研究の結果からはPPSを評価することの重要性が示唆される。</p>			